

# 日本語リズムの派生について

## —初級教材の分析と音声教育への応用をめざして—

名古屋大学留学生センター

鹿 島 央

### 要旨

本稿は、リズムをモーラの等時性ではなく、リズムユニットの配置特徴と捉えた場合、語、句、文レベルでどのようにリズムユニットが配置されているのか、アクセントを含めて分析したものである。さらに、このようなリズム型が初級教科書の最初でどのように扱われているのかを考察した。その結果、リズム型は形成されるアクセント句によって様々であるが、第1課では、動詞の活用語尾と文の種類に大きく依存していることが分かった。このことにより、リズム、アクセントの導入・練習は、名詞だけではなく、活用語尾などの文法項目に結びつけた練習方法も積極的に取り入れるべきことが改めて示唆された。

### キーワード

モーラ、リズムユニット、リズム型、アクセント句、アクセント

### 目次

- 0. はじめに
- 1. 分析の枠組み
  - 1. 1. リズム
    - 1. 1. 1. リズムとは
    - 1. 1. 2. リズムユニット
    - 1. 1. 3. CVCV について
    - 1. 1. 4. リズム型について
  - 1. 2. アクセント
  - 1. 3. アクセント句
- 2. 分析方法
  - 2. 1. 分析資料
  - 2. 2. 文法項目とリズム型

- 2. 3. 文の種類とアクセント句
  - 3. 分析結果
  - 4. まとめ
  - 5. 今後の課題
- 参考文献

### 0. はじめに

日本語学習者に対して日本語の発音を教えること、すなわち音声の教育は様々な側面を含んでいる。音声の伝える情報には、日本語の語や文に本来備わっている単音の特徴やアクセントなどの韻律的特徴である言語的情報、発話レベルでの意図や心的態度などのパラ言語的情報、さらには発話者の個人的な特徴を示す非言語的情報の三つがある。これらの情報を学習者は聞き、発話することになるので、そのための調音的、聴覚的訓練が必要となる。例えば、アクセントであれば、語の意味に係わる情報を担う以上に、日本語としての正確さ、および自然さに係わる要素として、その音声的实现が重要であるという立場に立てば、学習者にはアクセントの下降の位置が聴覚的にも判断できるような練習も取り入れることとなる。ただ、その導入、練習の方法は決まったものがあるわけではなく、各機関あるいは個人などで試行錯誤の上、実施しているのが現状である。

音声教育の実施については、場当たりの指導ではなく、あるコースでの音声項目それぞれの導入目的、目標、練習方法、評価方法、さらには秩序立った導入順序など、いわゆる音声教育の体系化が重要である。しかしながら現状では、体系化の糸口としては言語的情報に関するものが中心であり、依然として多くの知見を積み重ねる必要がある。筆者らは、言語的情報の中でも、「長さ」「高さ」に係わる韻律的特徴を第一義的なものと考え、これまで研究と実践を行ってきた。

具体的には、リズム、アクセント、イントネーションである。

本稿は、リズムをモーラの等時性ではなく、リズムユニットの配置特徴と捉えた場合、語、句、文レベルでどのようなリズムユニットの配置が初級の教科書で扱われているのかを、アクセントとの係わりを含めて分析するものである。このことにより、日本語母語話者の接しているリズムのパターンを明らかにでき、学習者への音声教授の新しい切り口を提供できるのではないかと考えられる。

## 1. 分析の枠組み

### 1. 1. リズム

#### 1. 1. 1. リズムとは

音声学大辞典(1976)では、リズムとは「連続的な運動現象において、規則的な反復する時間的進行秩序(p. 803)」と定義されている。Laver(1994:512)は、発話にはある種のリズムが知覚されるが、そのリズムは発話されたことばに何らかのユニット、ここではストレスピークを担う音節あるいは音節そのものが疑似周期的に繰り返していると聞き手が感じる感覚によるものであると述べている。日本語の場合は、繰り返しているとされるユニットは、モーラであり、モーラタイミングの言語であるとされている。

日本語教育の分野では、モーラあるいは拍をリズム形成の基本的な単位と考え、「拍感覚の養成」を目標に音声教育を行ってきた。この考え方は、今でも多くの機関で採用されていると思われる。しかしながら、この考え方に基づいて教育を行っても、「長さ」<sup>1</sup>を特徴的に使用する日本語(Ladefoged, 1982:226)では、学習者の抱える「長さ」に関する問題、つまりリズムに関係してくる問題はあまり改善が見られないというのが実情である。

そこで、鹿島(1992)では、土岐・村田(1989)を発展させた形で、リズムユニットというリズム形成ユニットを新たに仮定し、学習者に応用できるように整理した。この考え方は、橋本(2001)にも明示的に述べられているように「教育リズム」としての位置づけ

であり、特に日本語リズムを学習者に効果的に習得してもらうための方法の一つとして設定したものであるため、一般的に日本語が類型的に分類されているモーラタイミングであるという考え方と矛盾するものではない。ただ、音声学的な観点からは、日本語がモーラによるリズムであることは<sup>2</sup>必ずしも実証されている訳ではないため、このリズムユニットの音声的な実体の解明は、日本語学習者の側から日本語リズムを検証することにもつながっていくのではないかと考えている。

### 1. 1. 2. リズムユニット

リズムユニットという考え方は、モーラタイミングが主張するようなモーラが等時性をもつというのではなく、それぞれの発話には二つのタイプのユニット(ユニット1とユニット2)が配置され、その配置特徴がリズム感を生むとするものである。ここでの基本的概念は、リズムユニットとリズム型(あるいはリズムタイプ)であり、鹿島(1992, 1995, 2004)などで詳しく論じているが、本稿でも以下に述べる。

リズムユニットというのは、日本語リズムを形成する音韻的な単位で、2モーラ分の長さをもつユニット2と1モーラ分の長さをもつユニット1という二つを仮定している。ユニット2には、二つの構造があり、「(C)<sup>3</sup>VCV」(例:「さくら」の「さく」, 「いれもの」の「いれ」, 「もの」など)のように普通モーラ二つで構成されているユニットと「(C)VM」(例:「かばん」の「ばん」, 「さとう」の「とう」, 「にっぽん」の「にっ」, 「ぼん」など)のように特殊モーラと普通モーラで構成されているユニットがある。一方、ユニット1は「(C)V」(例:「さくら」の「ら」, 「うてん」の「う」など)のように普通モーラ一つで構成されているユニットである。

他方、リズム型というのは、リズムユニットを仮定することにより、語のモーラ数に応じて決まってくるユニットの配置特徴のことである。日本語のリズムはこれらの配置特徴により、語から発話文まで形成されると考える。

以下は、5モーラ語までのリズム型とその構造、お

<sup>1</sup> 「長さ」は、聴覚的な用語で、「持続時間」という音響的な用語とは区別する。

<sup>2</sup> 音韻的な意味で、モーラの役割は十分に認められると考える。

<sup>3</sup> (C)は、子音は選択的であることを示している。

よび例を示したものである。

1 モーラ語 リズム型 1型 (C) V 例：え， て

2 モーラ語 リズム型 2型 (C) VCV, (C) VM  
例：かた， えん

3 モーラ語 リズム型 21型  
(C) VCVCV, (C) VMCV

例：さくら， えんか

リズム型 12型 (C) VCVM

例：さとう

4 モーラ語 リズム型 22型

(C) VCVCVCV, (C) VMCVCV,

(C) VCVCVM, (C) VMCVM

例：みそかつ， とんかつ， かつどん，  
てんどん

リズム型 121型 (C) VCVMCV

例：きこうし

5 モーラ語 リズム型 122型

(C) VCVMCVM, (C) VCVMCVCV

例：びょういん， みかんばこ

リズム型 212型

(C) VMCVCVM, (C) VCVCVCVM,

(C) VCVCVCVCV

例：こうさてん， なつじかん，  
あかねぐも<sup>4</sup>

リズム型 221型

(C) VCVCVCVCV, (C) VMCVMCV,

(C) VMCVCVCV, (C) VCVCVMCV

例：なつやすみ， おおそうじ，  
いんそつしゃ， ひろこうじ

上記のようなユニットという考え方は、いわゆる「音節」、すなわち音声的な音節観に基づくものである。服部（1984：143）では、音節を「それ自身のなかには切れ目がなく、その前後に切れ目の認められる単音の連続または単音の単音」としている。この意味で、リズムユニット2のCVM、リズムユニット1のCVは音声的な音節に相当し、発話レベルでの最小単位である。しかしながら、リズムユニット2としている

CVCVについては、音声的な音節が二つ結合したものであり、リズムを形成する音韻的な単位となるのかどうか問題となる。

### 1. 1. 3. CVCVについて

モーラが音韻的な単位であるように、リズムユニットも音韻的な単位と考えている。上述したように、CVM、CVは音声的な音節でもあり、これが日本語のリズムを形成する単位として機能すると考えることは問題なさそう<sup>5</sup>である。一方、CVCVについては、これをリズムの単位として扱っているのは、金田一（1957）、別宮（1977）、上村（1997）があるが、少数である。リズムとしての機能ではないが、日下部（1962：244）では、現実に発音できる単位は音節であり、日本語の音節はもともと単独では2モーラの量<sup>6</sup>をもつと述べている。さらに語形成過程を説明するために2モーラで構成されたフット<sup>7</sup>という概念も導入され、日本語の語彙が2モーラというまとまりを好む傾向にあることが指摘されている。以上のことから、CVCVという2モーラがリズム形成に何らかの役割を果たしていると考え検証していくことは妥当であると考えられる。

モーラの音声学的検証は、1960年代から行われているが、等時性を示す確たる根拠は得られていないのが現状<sup>8</sup>である。鹿島（2004）は、モーラ理論で主張される語の全体長とモーラ数との関係を実験により検証したものであるが、同じモーラ数でも音節構成が異なれば、全体長は有意に異なることが分かり、音響的にはモーラの等時性は確認できなかった。さらに、CVCVという普通モーラ二つで構成されるリズムユニット2の音声的な実体についても検証している。結果としては、同じユニット2であるCVMとCVCVは、ユニット頭の子音が破裂音である場合は、同じ持続時間で実現しようとしていることが分かった。この実験では、被験者が2名だけであったことなど、さらに検討を重ねる必要があるが、以下では、CVCVについてもリズムを構成する単位と考え、論を進める。

<sup>4</sup> 語構成を考えてリズム型を決める方法は、意味分拍と言う（別宮 1977）。

<sup>5</sup> アクセントに関して言えば、東京方言でCVMは機能しないが、鹿児島方言ではアクセントを担う単位として機能している。すなわち、音韻的な単位と考えられる。

<sup>6</sup> テレビのCFで、「チオ」「ピタ」というように2モーラごとに区切って「チオピタ」という語を発話している例も観察される。

<sup>7</sup> 田窪他（1998：74）を参照。

<sup>8</sup> Warner & Arai（2001）のreviewを参照。

1. 1. 4. リズム型について

鹿島(1992)では、15種類の型を規定し、語から文までのリズムが考えられるとしている。しかしながら、これでは規定できないリズム型の語もあることが指摘<sup>9</sup>されている。本節では新しい考え方を示し、語から文へリズムが拡張していくことを示す。

これまで、リズムユニットの配置は語について決まっているとし、語を構成するモーラ数により、リズム型が規定されることを1. 1. 2節で示した。このように語について定まったリズム型は、句、文に拡張していくにつれ、リズム型も変化する。このことをリズムの派生とよぶと、下記の例1、2のように21型の「さかな」の前あるいは後にユニット1の要素がつくと、それぞれ22型になる。

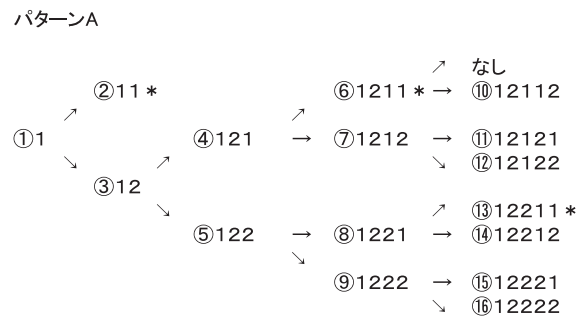
例1：さか・な+を→さか・なを（「・」はリズムユニットの切れ目）

例2：お+さか・な→おさ・かな

このような派生リズムを考慮に入れリズム型を考えると、文は最初は、1モーラのユニットか2モーラのユニットで始まり、そこにさらに1モーラあるいは2モーラのユニットが後続していく形となっている。1モーラあるいは2モーラのユニットで始まる文のパターンには、大きく分けて次の3通りしかない。まず、ユニット1にユニット2が後続するパターン、次にユニット2にユニット1が後続するパターン、最後にユニット2にユニット2が後続するパターンである。それぞれパターンA、パターンB、パターンCとすると、以下のようなパターンにそれぞれは派生していく<sup>10</sup>。

(1) パターンA：このパターンは、ユニット1で始まるため、第二ユニットは必ずCVMのような特殊モーラを含むユニット2になるという特徴がある。

表1：パターンA（\*は、存在しないリズム型を表す）



- ① 1 (て)
- ② 1 + 1 (て+を) → (てを) のようにユニット2で始まるので、この型はない。
- ③ 1 + 2 (か+ばん, じ+どう) などのような語。
- ④ 1 + 2 + 1 (ひ+こう+き, か+ばん+を, か+ばん+だ) などの語, 句, 文<sup>11</sup>。
- ⑤ 1 + 2 + 2 (じ+どう+かん, ひ+こう+きに, じ+かん+です)
- ⑥ 1 + 2 + 1 + 1 (ひ+こう+き+に) → (ひ+こう+きに) となり, ⑤と同じ型となるので, この型はない。  
ただし, さらにユニット2が後続する場合は, 可能な型となる。
- ⑦ 1 + 2 + 1 + 2 (に+ほん+じ+かん, ひ+こう+き+から<sup>12</sup>, か+ばん+を+かう)  
語としては複合語, 句, 文のパターンとして可能。
- ⑧ 1 + 2 + 2 + 1 (か+ばん+うり+ば, に+ほん+じん+は, う+どん+です+か)
- ⑨ 1 + 2 + 2 + 2 (さ+とう+せい+さん, か+ばん+うり+ばは, う+どん+から+うる)
- ⑩ 1 + 2 + 1 + 1 + 2 (じ+どう+しゃ+ず+かん, い+とう+へ+い+こう)  
ユニット1の連続は, ユニット2となるのが一般的であるが, 12型の語などが後続すると可能になる。
- ⑪ 1 + 2 + 1 + 2 + 1 (に+ほん+じ+かん+に, か+ばん+を+かつ+た)
- ⑫ 1 + 2 + 1 + 2 + 2 (に+ほん+じ+かん+では, か+ばん+を+かつ+てね)

<sup>9</sup> 例えば、「ながらばしどおり」という通りの名前はどうかと問われたことがある。

<sup>10</sup> 橋本(2001)には10モーラまでのリズム型があるが、本稿では、リズムの派生に焦点をあてて記述している。

<sup>11</sup> 発話文は韻律平面上の用語であるが、ここでは単に文とする。

<sup>12</sup> ここでは「名詞(2モーラ以上)+から」の「から」を一かたまりの要素と考えて区切る。

⑬ 1 + 2 + 2 + 1 + 1 (か+ばん+うり+ば+は) → (か+ばん+うり+ばは)となり、⑨と同じ型。ただし、⑥と同じく③のパターンが後続する場合は、可能な型となる。

⑭ 1 + 2 + 2 + 1 + 2 (じ+どう+まき+ど+けい、う+どん+から+い+こう)

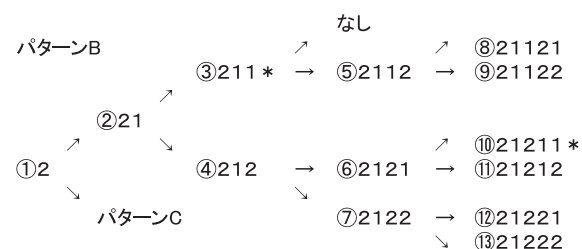
⑮ 1 + 2 + 2 + 2 + 1 (か+ばん+うり+ば+で+は、う+どん+から+た+べ+る)

⑯ 1 + 2 + 2 + 2 + 2 (か+ばん+うり+ば+で+なら、う+どん+から+た+べ+るよ)

これまでで最大9モーラまでの派生リズムを観察したが、さらに、同様に1モーラあるいは2モーラのユニットが後続することで、リズムが派生していく。これらの型は、12型を中心に行っていることが特徴である。

(2) パターンB:ユニット2にユニット1がまず後続するパターンである。

表2: パターンB (\*は、存在しないリズム型を表す)



① 2 (かさ, さん, ほう)

② 2 + 1 (さか+な, さん+ま, かさ+を, きま+す<sup>13</sup>)  
など、語、句、文。

③ 2 + 1 + 1 (さか+な+を) → (さか+なを) となり、パターンCの②と同じ型となるので、この型はない。ただし、特殊モーラを含むユニット2が後続する場合は、可能な型となる。パターンAの⑩を参照。

④ 2 + 1 + 2 (こう+さ+てん, あす+こ+よう)

⑤ 2 + 1 + 1 + 2 (てん+き+よ+ほう, これ+を+の+もう)

ユニット1の連続は、ユニット2となるのが一般的であるが、特殊モーラを含むユニット2などが後続

すると可能になる。以下、⑧と⑨も同じ。

⑥ 2 + 1 + 2 + 1 (きょう+と+りょう+り, なご+や+こう+へ)

⑦ 2 + 1 + 2 + 2 (きょう+と+りょう+りは, なご+や+こう+です)

⑧ 2 + 1 + 1 + 2 + 1 (てん+き+よ+ほう+は, これ+を+の+もう+よ)

⑨ 2 + 1 + 1 + 2 + 2 (てん+き+よ+ほう+では, これ+を+の+もう+かな)

⑩ 2 + 1 + 2 + 1 + 1 このパターンはない。

⑪ 2 + 1 + 2 + 1 + 2 (ろう+む+しん+さ+かん, きつ+さ+てん+い+こう)

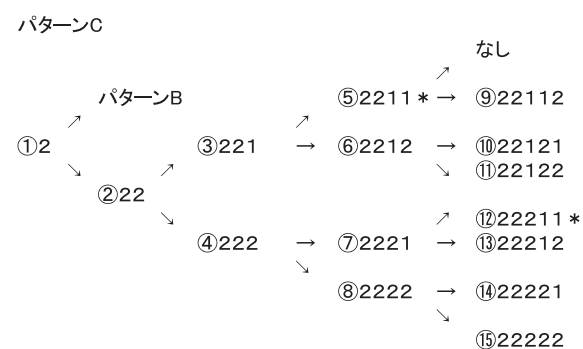
⑫ 2 + 1 + 2 + 2 + 1 (こう+さ+てん+から+は, かい+が+てん+い+つ+た)

⑬ 2 + 1 + 2 + 2 + 2 (こう+さ+てん+から+では, かい+が+てん+い+つ+てね)

パターンBは、型が一番少なく、5つのユニットをもつ場合は5通りである。なお、この場合、拍数については7-9拍となる。

(3) パターンC:ユニット2にユニット2が最初に後続するパターンである。

表3: パターンC (\*は、存在しないリズム型を表す)



① 2 (かさ, さん, ほう)

② 2 + 2 (だい+がく, さか+なを, たべ+ます)

③ 2 + 2 + 1 (とう+きょう+と, とう+きょう+へ, とう+きょう+だ)

④ 2 + 2 + 2 (こう+どう+かん, とう+きょう+とに, としょ+かん+です)

⑤ 2 + 2 + 1 + 1 (とう+きょう+と+に) → (とう

<sup>13</sup> 「ます」「です」がユニット1だけに後続する場合、「きます」は、「き+ます」ではなく、「きま+す」のように分けている。同様に、「めです」は、「めで+す」とする。



+きょう+とに) となり, ④と同じ型。ただし, ユニット2が後続する場合は, 可能な型となる。

- ⑥ 2+2+1+2 (ほん+やく+じ+てん, てん+ぶら+を+かう)
- ⑦ 2+2+2+1 (さん+ばん+のり+ば, てん+どん+です+か)
- ⑧ 2+2+2+2 (つう+はん+せい+かつ, てん+どん+から+うる)
- ⑨ 2+2+1+1+2 (ろう+どう+しゃ+き+かん, とう+きょう+へ+い+こう)  
ユニット1の連続は, ユニット2となるのが一般的であるが, 12型の語などが後続すると可能になる。
- ⑩ 2+2+1+2+1 (とう+かい+じ+しん+に, かん+ばん+を+かつ+た)
- ⑪ 2+2+1+2+2 (とう+かい+じ+しん+には, てん+ぶら+を+かつ+てね)
- ⑫ 2+2+2+1+1 (かん+ばん+うり+ば+は)  
→ (かん+ばん+うり+ばは) となり, ⑧と同じ型。ただし, ⑤と同じくユニット2が後続する場合は, 可能な型となる。
- ⑬ 2+2+2+1+2 (ゆう+びん+きょく+の+ほう, てん+どん+です+か+ねえ)
- ⑭ 2+2+2+2+1 (てん+どん+うり+ば+は, てん+どん+です+から+ね)
- ⑮ 2+2+2+2+2 (てん+どん+うり+ば+は, さく+ぶん+から+か+こう)

パターンCは, パターンAとまったく平行的にパターン化し, 違いは文頭のユニットが1か2かだけの違いとなっている。

以上のことから, 文のパターンは上記の三つのパターンのどれかに該当するはずであり, 主要な違いは, 文の始まりが, 12型, 21型, あるいは22型のいずれかであることになる。

## 1. 2. アクセント

長さのパターンは前節のようになるが, 実際にはアクセントのパターンが入ってくるので, アクセントの

観点を考慮して, さらにパターン化<sup>14</sup>を考へてみる。以下では, 12型, 21型, 22型に可能なアクセント型を検討する。

### (1) 12型

このリズム型は, 「さとう」「こてん」など, 第2ユニットに特殊モーラを含むので, 可能なアクセント型は, 頭高型, 中高型, 平板型の3通りであり, 特殊拍にアクセント核を担わない<sup>15</sup>ため, 尾高型はない。

### (2) 21型

このリズム型には, 「めがね」のような普通モーラだけで構成される語と「とうき」のように第1ユニットに特殊拍をもつものの2種類がある。前者には, 4通りのアクセント型, 後者には, 特殊拍にアクセント核を担わないため3通りのアクセント型がある。

### (3) 22型

このリズム型には, 「こうどう」「そうかつ」「かつどう」「もとやま」のように, 特殊モーラを含むユニット2と含まないユニット2との組み合わせで, 4種類ありうる。それぞれの語についてのアクセント型は, 理論上, 3通り, 4通り, 4通り, 5通りとなる。ここで, 21型から派生して, 22型になる場合を, 例として以下に示す。

- め ‘がね+を→め’ が・ねを<sup>16</sup>  
たま ‘ご+を→たま’ ・ごを  
あたま ‘+を→あ・ま’ を  
さかな+を→さか・なを

## 1. 3. アクセント句

実際には文は, いくつかの小さい単位に区切られ発話され, それぞれの区切りがある音調をもち, そのつながりが発話文全体の音調, すなわちイントネーションを決めることになる。

この区切りのことをアクセント句<sup>17</sup>とよぶが, アクセント句の大きさは, 長さの配置, すなわち, リズム型をもち, 同時に高さの変化, 句音調を伴っていることになる。

これまでの研究で, アクセント句を形成する要因として前川(1998)では以下を挙げている。

<sup>14</sup> 実際にはこのような複雑なパターンで母語話者は話し, 聞いているが, このような精緻化は, 学習者に対する音声教育では不要であるという議論もありうるが, 本稿では, 音声教育の可能性ということを視野に入れて基礎的な分析を行うものである。

<sup>15</sup> 本稿では, 東京方言のみを対象とする。

<sup>16</sup> 便宜上「」を, アクセント核とする。

<sup>17</sup> 句の議論については, 前川(2006)あるいは上野(2003)などを参照されたい。

- (1) 文の構造によるアクセント句形成の違い  
カネオクレタ | ノム, カネオクレ | タノム  
(「|」はアクセント句境界)
- (2) 「無核語+無核語」, 「無核語+有核語」の連鎖は,  
一つのアクセント句にまとまりやすい  
キノーマユミガ, アカイヤネガ ‘ワラ
- (3) 文末の述語とその直前の要素は, 一つのアクセント句にまとまる傾向  
ナベヤキヲゴツタ

ここでは述べられていないが, フォーカス<sup>18</sup>によっても, アクセント句は形成されることが知られている。

したがって, 以下では, とりあえずはアクセント句のリズム型とアクセントパターンを上記(1)から(3)に基づき記述し, どのようなパターンが頻度として多く出現するのかを検討する。

## 2. 分析方法

### 2. 1. 分析資料

本稿では, 日本語教科書である『A Course in Modern Japanese Vol. 1』(名古屋大学出版会)の第1課のドリル練習をとりあげ, 初めて日本語を習う学習者が, どのようなリズム型にふれているのかを分析する。

### 2. 2. 文法項目とリズム型

第1課では, 動詞の活用四形である「ます」「ました」「ません」「ませんでした」と疑問形の「ますか」「ましたか」が, 主な項目である。これに, 疑問詞の「なに」「どこ」が加わり, さまざまな名詞が組み合わせられ, 文が構成されている。これらの項目のリズム型は, 以下のようになる。

ます: 2型, まし・た: 21型, ま・せん: 12型,  
ま・せん・でし・た: 1221型  
ます・か: 21型, まし・たか: 22型 (「・」はリズム境界)

これらに1拍の語が先行すると, 注13で述べたように, 以下のようにリズムが派生する<sup>19</sup>。

き+ます→きま・す (21型), き+ました→きま・した (22型)

き+ません→きま・せん (22型), き+ませんでした→きま・せん・でし・た (221型)

ただし, 3拍以上の奇数拍の語が先行する場合は, 後続の語がユニット1で始まる場合に限り, 融合するリズムになると考える。

およぎ+ます→およ・ぎ・ます (212型)

およぎ+ません→およ・ぎま・せん (222型)<sup>20</sup>

### 2. 3. 文の種類とアクセント句

1.3節で述べた句になりやすい傾向の中で, (3)は, 平叙文に関する場合である。

(例) ルインさんは | ほんをよみます (「|」はアクセント句境界, 2つのアクセント句)

諾否疑問文では, (3)は適用されない。

(例) ルインさんは | ほんを | よみますか (3つのアクセント句)

否定文でも (3)は適用されないのが普通である。

(例) ルインさんは | ほんは | よみませんでした (3つのアクセント句)

疑問詞疑問文では, (3)の傾向が認められる。

(例) ルインさんは | なにをよみますか (2つのアクセント句)

このように考えると, 結局はアクセント句のリズム型とアクセント核の位置により様々な型が生成されるということが分かる。これに全体的なイントネーションが重なることで, 言語学的な情報を表現する「正確さ」が実現できることになる。もちろん, 発話文としての「適切さ」や「流暢さ」などを備えるには, パラ言語的情報が重要になってくる。

## 3. 分析結果

本節ではアクセント句のリズム型を分析するため, アクセント句のモーラ数ではなく, 含まれるユニットの数に基づいて結果を検討していくこととする。例えば, 121型と221型は, リズムユニットはどちらも3つ

<sup>18</sup> 郡 (1997) などを参照。

<sup>19</sup> 「き・ます」より「きま・す」の方が自然であろうという経験的な感覚によるものである。

<sup>20</sup> 名詞の結合では, このようにならないのは, 語としての結合の強さが異なることによるのではないかと考えられる。「てんき+よほう→てん・きよ・ほう (222型)」ではなく, 「てん・き・よ・ほう (2112型)」となる方が, 自然ではないか。

あり、前者は、「短・長・短」、後者は「長・長・短」<sup>21</sup>のようなリズム型を形成していると言えるが、モーラ数は異なっている。

第1課のドリルには、代入練習の語も入れると、全部で93文あり、アクセント句のユニット数は、2（「たべ・ます」：22型、ユニット数は2）から9（「さか・な・ふら・い・てい・しよく・を・たべ・ます」：212122122型、ユニット数は9）までである。

表4は、93文をそれぞれの文の最後のアクセント句のユニット数によって、その数を示したものである。

表4：ユニット数別の文の数

ユニット数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
文の数	0	1	31	16	21	13	9	1	1	93

表4から、3から7ユニットで構成されているアクセント句が多いことが分かる。以下の表5から表9までは、それぞれのユニット数でのリズム型を示したものである。表の中でリズム型の後の括弧内には、それぞれのアクセント句のアクセント核の位置を示している。「-」の記号は、文末から数えて何モーラ目にあるかを示し、「-」記号のない場合は、アクセント句頭からのモーラ数である。二つ数字がある場合は、アクセント句内で2回の声の下降があることを示している。

表5は、ユニットを3つもつアクセント句のリズム型である。

表5：3つのユニットをもつアクセント句

リズム型	生起数	例
212 (-2)	15	よみません、いきません
221 (-3)	11	ききますか、よみますか
222 (-4)	5	よみましたか、ききましたか

いずれも否定文、疑問文の最終アクセント句であるので、この部分だけでアクセント句を形成するため、比較的ユニット数の少ない句となっているのと同時に、規則的なアクセント核の配置となっている。

表6は、ユニットを4つもつアクセント句のリズム型である。

表6：4つのユニットをもつアクセント句

リズム型	生起数	例
2122 (1, -2)	2	ほんをよみます
2222 (-2)	7	かんじをよみます、わたしもたべます
2222 (1, -2)	5	サラダをたべます、テープをききます
2222 (-3)	1	べんきょうしますか
2221 (1, -2)	1	テレビをみます
2221 (1)	文頭	カーリンさんは、パンパンさんは
2121 (1)	文頭	アリスさんは
1221 (1)	文頭	ルインさんは、ナロンさんは

表6から、三つの型があることが分かるが、ここでは平叙文が動詞と先行する名詞とで一つのアクセント句を形成するので、リズム型は先行する名詞の型に依存する。同じリズム型でもアクセント核の位置により、細かく見れば異なった型となる。2222 (-3)の型は、拍数の多い語の疑問文のため、ここに分類されている。表6の下3行は、文頭のリズム型を参考のために掲載してある。表2、表3から、ユニット2で始まるリズム型は、2212型以外は表6にはすべて網羅されていることが分かる。

表7は、ユニットを5つもつアクセント句のリズム型である。

表7：5つのユニットをもつアクセント句

リズム型	生起数	例
22122 (-2)	3	しんぶんをよみます
22122 (1, -2)	1	おんがくをききます
22122 (2, -2)	1	としょかんへいきます
22122 (3, -2)	3	CD (シーディー) をききます、コーヒーをのみます
21221 (-5)	5	よみませんでした、いきませんでした
21221 (1, -4)	1	なにをしましたか、どこへいきますか
21221 (1, -3)	5	なにをよみますか、ほんをよみました
22221 (-4)	1	べんきょうしましたか
12122 (1, -2)	1	ごはんをたべます

表7から、5つのユニットのあるリズム型は4通りあり、同じリズム型でもアクセント核の位置により、異なった型となる。さらにリズム型の違いは、動詞「ます」に先行する名詞のリズム型によることが分かる。「おんがくをききます」と「ごはんをたべます」はリズム

<sup>21</sup> ユニット1を「短」、ユニット2を「長」とする。



ム型は異なっているが、アクセント核の位置は同じである。疑問詞のある文も、平叙文と同じリズム型となるので、文型練習としての可能性が考えられる。

表8は、ユニットを6つもつアクセント句のリズム型である。全93文のうち、13例出現している。

表8：6つのユニットをもつアクセント句

リズム型	生起数	例
221221 (-3)	1	しんぶんをよみました
221221 (1, -3)	1	おんがくをききました
221221 (2, -3)	1	としょかんへいきました
221221 (3, -3)	1	CD (シーディー) をききました
222122 (3, -2)	1	けんきゅうしつへいきます
222221 (-2)	2	かんじをべんきょうします
222221 (-5)	1	べんきょうしませんでした
222222 (3, -2)	1	けんきゅうしつへもいきます
212222 (4, -2)	1	サンドイッチをたべます
212222 (1, -3)	1	なにをべんきょうしますか
122122 (1, -2)	1	ルインさんもたべます
122222 (4, -2)	1	カレーライスもたべます

表8から、リズム型は7通りであるが、基本的には動詞の活用部分のリズム型と先行する名詞のリズム型との組み合わせになるので、練習では、動詞と名詞に分けて導入すべきではないかと思われる。一方、アクセントについては、「ます」「ました」「ませんでした」など文法項目により一定であるので、リズム型と一緒に導入、練習することで効果的になると考えられる。

表9は、ユニットを7つもつアクセント句のリズム型である。全93文のうち、9例出現している。

表9：7つのユニットをもつアクセント句

リズム型	生起数	例
2212221 (-2)	1	ぶんぼうをべんきょうします
2212221 (3, -2)	2	ひらがなをべんきょうします
2212222 (-3)	1	ぶんぼうをべんきょうしました
2221221 (3, -3)	1	けんきゅうしつへいきました
1222221 (-2)	1	にほんごをべんきょうします
1222221 (4, -3)	1	カレーライスをたべました
1222222 (-3)	1	にほんごをべんきょうしました
1222222 (4, -4)	1	カレーライスをたべましたか

表9からも、文法項目の習得とあわせて、アクセン

ト核の位置とリズム型を練習することが効果的であることが窺われる。アクセント句全体のリズム型がどんなに長くなっても、部分の組み合わせとして考えることが必要になってくると思われる。

#### 4. まとめ

リズムユニットを設定することで、リズムの派生がユニット1と2の組み合わせとしてすべて表せ、アクセント句のリズム型はあるものはユニット2の連続として、あるものは21型の連続としてなど、特徴的な連鎖を生成していることになる<sup>22</sup>。本稿では、特に文の最後にあるアクセント句を中心に考察したので、動詞の活用語尾により「ます」(2型)から「ました」「ますか」(21型)あるいは「ません」(12型)、「ませんでした」(1221型)へと、文の種類によるアクセント句の形成の仕方と相俟って、以下のように様々なリズム型が生成されることが分かった。しかしながら、同様の型が繰り返し出現することから、いくつかの型に注目した練習の可能性が考えられる。

(1) 偶数拍の動詞「ます形」から、諾否疑問文、否定文への派生

例：たべ・ます (22) → たべ・まし・た (221) → たべ・まし・たか (222)  
 ↘ たべ・ま・せん (212) → たべ・ま・せん・でし・た (21221)

(2) 奇数拍の動詞「ます形」から、諾否疑問文、否定文への派生

例：みま・す (21) → みま・した (22) → みま・した・か (221)  
 ↘ みま・せん (22) → みま・せん・でし・た (2221)

平叙文では先行する名詞のリズム型がアクセント句全体のリズム型を決める鍵となるが、動詞の活用語尾を含むリズム型には影響は及ぼさない。

(3) 偶数拍の名詞が先行するリズムの派生

例：しん・ぶん・を (221) よみ・ます (22) → 22122  
 しん・ぶん・を (221) よみ・まし・た (221)  
 → 221221  
 しん・ぶん・を (221) みます (21) → 22121  
 しん・ぶん・を (221) みました (22) → 22122

<sup>22</sup> モーラでの分析では、すべて1の連続としてとらえることになる。

(4) 奇数拍の名詞が先行するリズムの派生<sup>23</sup>

例：ざっ・しを (22) よみ・ます (22) →2222

ざっ・しを (22) よみ・まし・た (221) →22221

ざっ・しを (22) みます (21) →2221

ざっ・しを (22) みました (22) →2222

以上のように、アクセント句が長くなっても、基本的には同様の型で構成される例が多いことが明らかである。アクセント核の位置については、活用語尾によって異なるが、リズムの派生により変わることはない。

本稿では、名詞だけのリズム型については、ほとんど触れていないが、動詞活用語尾を含むアクセント句のリズム型と全く同じである。

これまで日本語初級クラスでは、名詞のリズム型とアクセント型の導入、練習を主に行ってきたが、今回の分析を通して、文法項目とのリズム、アクセントの関連という視点から、再度音声教育を見直す必要がある。

## 5. 今後の課題

一つには、動詞活用語尾を含むアクセント句のリズム型の規則をより精緻にした上で、導入、練習方法をきめることが挙げられる。上述したように、これだけではなく他の文法項目との可能性についても検討する。他の一つは、いくつかのリズムパターンの難易度について分析することである。これまでの研究で、学習者の母語背景により、リズム型の生成にはいろいろな特徴がみられたが、分析対象がほとんど「語」であったので、今後は「文」へ対象を広げて分析していく予定である。

## 参考文献

- 別宮貞徳 (1977) 『日本語のリズム』講談社現代新書 (2005年, ちくま学芸文庫に再録).  
橋本慎吾 (2001) 「日本語の『教育リズム』に関する先行研究の比較」『岐阜大学留学生センター紀要』 pp. 107-116.

服部四郎 (1984) 『音声学』岩波書店.

鹿島 央 (1992) 「日本語のリズム単位とその型について—日本語教育への応用をめざして—」カッケンブッシュ 寛子他編『日本語研究と日本語教育』 pp. 305-319. 名古屋大学出版会.

\_\_\_\_\_ (1995) 「初級音声教育再考」『日本語教育』 86:103-115.

\_\_\_\_\_ (2004) 「日本語リズム単位の音響的实现について」小山悟等編『言語と教育—日本語を対象として—』くろしお出版, pp. 163-181.

\_\_\_\_\_ (2006) 「日本語リズム・アクセント教育の実践」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』 13: 117-130, 名古屋大学留学生センター.

金田一春彦 (1957) 『日本語』岩波新書.

郡 史郎 (1997) 「『当時の村山首相』の2つの意味と2つの読み—名詞句の意味構造とアクセントの弱化について—」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版, pp. 123-146.

日下部文夫 1962 「東京語の音節構」柴田・北村・金田一編 (1977) 所収, pp. 241-267.

Ladefoged, P. (1982) *A Course in Phonetics*, HBJ.

Laver, J. (1994) *Principles of Phonetics*, Cambridge Univ. Press.

前川喜久雄 (1998) 「第1章 音声学」田窪他『岩波講座 言語の科学2 音声』 pp. 2-52.

\_\_\_\_\_ (2006) 「イントネーション研究発展の要因」『音声研究』第10巻第3号, pp. 7-17.

日本音声学会編 (1976) 『音声学大辞典』三修社.

柴田 武・北村 甫・金田一春彦編 (1977) 『日本の言語学 第2巻音韻』大修館書店.

田窪行則・前川喜久雄・窪蘭晴夫・本多清志・白井克彦・中川聖一 (1998) 『岩波講座 言語の科学2 音声』岩波書店.

土岐 哲・村田水恵 (1989) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ12 発音・聴解』荒竹出版.

上村幸雄 (1997) 「日本語音声の歴史的なふかさと地域的なひろがり」杉藤美代子 (監修) 『諸方言のアクセントとイントネーション』 pp. 21-6, 三省堂.

上野善道 (2003) 「第4章 アクセントの体系と仕組み」北原保雄 (監修) 上野善道 (編) 『朝倉日本語講座3 音声・音韻』 pp. 61-84.

Warner, N. & Arai, T. (2001) "Japanese Mora-Timing: A Review" *Phonetica* 58: 1-25.

<sup>23</sup> 2拍の助詞「から」「まで」などが名詞に後続する場合については、リズム型に影響しないと考える。このあたりの規則の精緻化が必要である。注20も参照。